

経済・金融フラッシュ

No.07-017 2007/05/25

消費者物価(全国 07年4月、東京 07年5月)

—夏頃までゼロ～小幅マイナスで推移か

ニッセイ基礎研究所 経済調査部門 シニアエコノミスト 斎藤 太郎

TEL:03-3512-1836 E-mail:tsaito@nli-research.co.jp

1. コア CPI は 3 ヶ月連続のマイナス

総務省が5月25日に公表した消費者物価指数によると、4月の消費者物価（全国、生鮮食品を除く総合、以下コア CPI）は、前年比▲0.1%と3ヶ月連続のマイナスとなったが、3月の▲0.3%からマイナス幅は縮小した。事前の市場予想（ロイター集計：▲0.1%、当社予想も▲0.1%）通りの結果だった。

マイナス幅縮小の要因は、石油製品の下落率縮小(3月：▲1.4%→4月：▲0.6%)、電気代のプラス転化(3月：▲0.8%→4月：0.2%)、診療代の上昇率拡大(3月：0.1%→4月：1.9%)などである。電気代、診療代は前月よりも価格が上昇したわけではないが（電気代は前月比では下落）、前年の水準が低かったため、前年比上昇率が高まった。

総合指数は前年比 0.0%（3月：▲0.1%）、食料（酒類除く）及びエネルギーを除く総合は同▲0.2%（3月：▲0.4%）であった。

消費者物価指数の推移

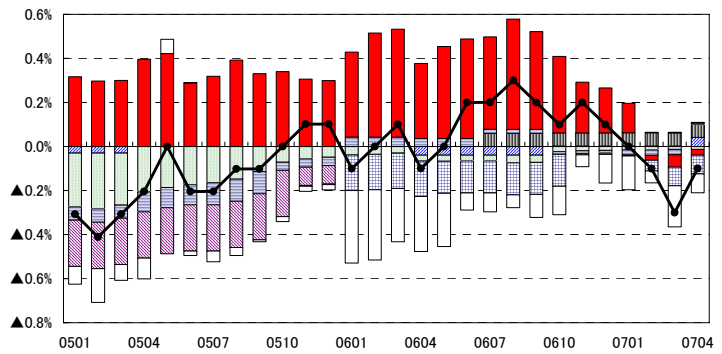
(前年同月比、%)

	全 国			東 京 都 区 部		
	総 合	生鮮食品を除く総合	食料(酒類除く)及びエネルギーを除く総合	総 合	生鮮食品を除く総合	食料(酒類除く)及びエネルギーを除く総合
06年 1月	▲0.1	▲0.1	▲0.7	▲0.3	▲0.4	▲0.6
2月	▲0.1	0.0	▲0.5	▲0.3	▲0.2	▲0.5
3月	▲0.2	0.1	▲0.5	▲0.4	▲0.1	▲0.3
4月	▲0.1	▲0.1	▲0.6	▲0.1	▲0.1	▲0.3
5月	0.1	0.0	▲0.5	0.0	▲0.1	▲0.2
6月	0.5	0.2	▲0.4	0.3	0.0	▲0.3
7月	0.3	0.2	▲0.3	0.2	0.0	▲0.1
8月	0.9	0.3	▲0.4	0.8	0.0	▲0.2
9月	0.6	0.2	▲0.5	0.5	0.0	▲0.3
10月	0.4	0.1	▲0.4	0.4	0.1	▲0.1
11月	0.3	0.2	▲0.2	0.2	0.2	0.0
12月	0.3	0.1	▲0.3	0.3	0.2	0.0
07年 1月	0.0	0.0	▲0.2	0.1	0.2	0.1
2月	▲0.2	▲0.1	▲0.3	0.0	0.0	▲0.1
3月	▲0.1	▲0.3	▲0.4	0.1	▲0.1	▲0.3
4月	0.0	▲0.1	▲0.2	0.1	0.0	▲0.2
5月	—	—	—	0.0	0.0	▲0.2

(資料)総務省統計局「消費者物価指数」

(前年比)

消費者物価指数(生鮮食品除く、全国)の要因分解



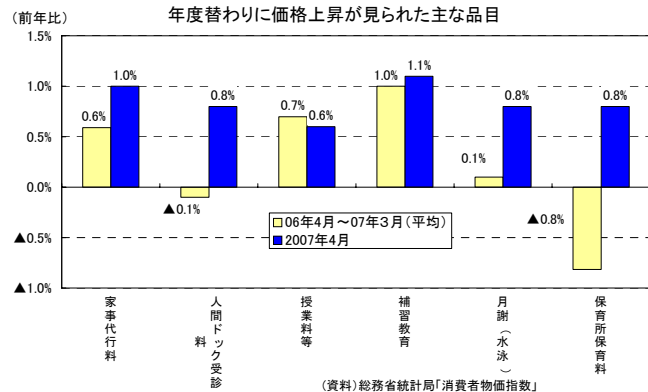
(資料)総務省統計局「消費者物価指数」

(年・月)

2. 年度替わりの料金改定の影響は限定的

先月公表された4月の東京都区部では、サービス価格を中心とした年度替わりの料金引き上げの動きはあまり見られなかったが、全国4月分もほぼ同様の結果であった。

家事代行料（06年度：0.6%→07年4月：1.0%）、人間ドック受診料（06年度：▲0.1%→07年4月：0.8%）、補習教育（06年度：1.0%→07年4月：1.1%）、保育所保育料（06年度：▲0.8%→07年4月：0.8%）など、一物品目に価格上昇の動きが見られたが、物価全体に与えるインパクトは小さなものとどまった。

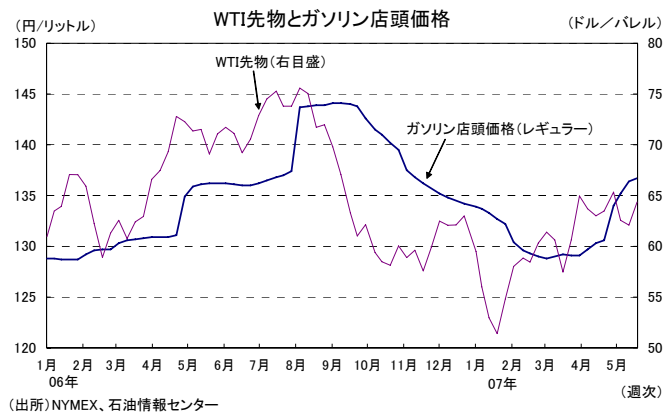


5月の東京都区部のコアCPIは、4月に続き前年比0.0%となり、事前の市場予想（ロイター集計：0.0%、当社予想も0.0%）と同じ結果であった。ガソリン価格は前月比では4.8%の大幅上昇となったが、前年比では▲0.2%（4月：0.0%）となり、コアCPIの前年比上昇率に与える影響は小さかった。

3. 夏頃までゼロ～小幅マイナスで推移か

5月の東京都区部の結果から考えると、来月公表される5月の全国コアCPIは前年比▲0.1%程度になると見込まれる。原油価格は3月後半から再び上昇し、ガソリンの店頭価格も4月以降は上昇に転じている。今後数カ月のうちに、ガソリン価格が前年比で上昇に転じる月が出てくる可能性もあるだろう。ただし、足もとのガソリン価格は昨年8～9月にかけてのピークと比べれば5%程度低い水準にある。今後、原油、ガソリン価格が横ばい圏で推移すれば、石油製品による前年比押し下げ寄与は8～9月にかけて▲0.1～0.2%程度になる。

今後の原油価格の動向にもよるが、基調的な物価上昇圧力が高まらない中、コアCPIの前年比上昇率は、夏頃までゼロ～小幅マイナスで推移する可能性が高いだろう。



(お願い)本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。

(Copyright ニッセイ基礎研究所 禁転載)